

明日は天気（二場）

岸田國士

青空文庫

番頭	風呂番	宿の女中 乙	宿の女中 甲	妻	夫
----	-----	-----------	-----------	---	---

一

真夏——雨の日

ある海岸の旅館——海を見晴らせる部屋

夫
（腹這ひになり、泳ぎの真似をしてゐる）

妻
（絵葉書を出す先を考へてゐる）

女中
（はひつて来る）

夫
（泳ぎの真似をやめて、新聞を読んでゐる風をする）

女中
ほんたうに毎日お天気がわるくつて、御退屈でございま

せう。

妻　ええ、でも、海へは何時でもはひれるんだから、かうして、静かな処で、雨の音を聴いてゐるのもいいわ。どうせ避暑に来たんだから、涼しいのが何よりよ。

女中　それやもう、お涼しいことは、なんて申しましても、お天気の日よりはね。これで、海岸と申しましても、日が照りますと、なかなか、ちつとしてはゐられないんでございますよ。

妻　さうでせうね、でも、かういふ風だと、お客さまも少いでせう。

女中　はあ、もう、これで、ぼつぼつお引上げになる方もありますんですよ。東京の方も、お涼しいさうでございますね、昨

今は……。

妻　そんなことはないでせう。あたしたちの来た日なんかは、少し曇つてたけれど、随分蒸し暑かつたわ。早くどつかへ行きたいつて、忙しいところを逃げ出して来たんですもの。

女中　さうでございますかね。昨晚、こちらの番頭さんが東京へ参りましたんですよ。一寸、用がございましたもんですからね。その番頭さんから、今朝、電話で、東京も昨晚から大雨で、浴衣一枚では寒いくらゐだつて申して参りましたんですよ。

夫　おい、君、東京の話はよしてくれ。折角、仕事の事を忘れて、二三日ゆつくり頭を休めに来たんだから……。

女中　おや、とんだ失礼を……。何か御用はございせんか。

夫 あつたら呼ぶから、まあ、君は引下つてくれ。

妻 なんですよ、あなたは……そんな無愛想なことをおつしやつて……。

女中 どうも、失礼いたしました。（出で去る）

妻 およしなさいよ、そんなに八ツ当りをなさるのは……。いぢやないの、雨が降つてたつて……泳いでらつしやいよ、そんなに泳ぎたければ……。

夫 雨が降つても泳げ……？ 人が見たら氣違ひだつて云ふぜ。

妻 畳の上で泳いでる方がよつぽど氣違ひだわ。

夫 いつそ、東京へ帰らうか。

菱　もう一日ゐてみませうよ。なんだか、向うの空が明るくなつて来たやうだわ。若しかしたら、明日はお天気よ。

夫　——東京は随分涼しいさうね。こちらは毎日暑くつて、海へ一度もはひりませんつて、さう、書け、端書に。

妻　あたし、百合子さんに、かう書いたの。——東京はさぞお暑いことδεう。こちらは、朝夕の散歩に羽織がいるくらゐにて……。

夫　朝夕の散歩……？

妻　まあ、聴いていらつしやい。——羽織がいるくらゐにて、日中は、海にはひり通しですから暑さ知らず……。

夫　やれやれ……。

妻 二三日の間に、恥かしいほど黒くなりました。

夫 おい。

妻 黙つてらつしやい。——今日あたり、船で沖へ出てみようかと相談をしてゐるところです。

夫 凄いな。そこにある端書、みんな、おなじ文句か。

妻 大同小異よ。

夫 だれだれへ出すの。

妻 これは百合子さんでせう。それから、これが、母さん。これが、お孝ちゃん。これが、お隣の奥さん。これが、裏のお神さん……。

夫 おれは幸にしてお前と一緒にゐるから、さういふ端書を受

け取らずに済むわけだね。全く、避暑に行く女を友に持つ勿れだね。おや、ほんとに明るくなつて来たぜ。

妻　小止みになつて来たわ。うれしい。

夫　これ、なんていふ泳ぎか知つてるか。

妻　蛙泳ぎでせう。

夫　よし、さうだ。これは……。

妻　それで、やつぱり、泳ぎなの。

夫　泳ぎさ。水府流だ。これが、拔手……。

妻　あたしには、どれを教へて下さるの。

夫　まあ、蛙だね。これが一番楽で、やさしい。一寸、此処でやつてごらん。

妻 いやよ、こんなところや……。

夫 稽古をするのにや、此処の方がいいんだぜ。

妻 いや。

夫 可笑しな奴だな。お前は一度も海へはひつたことはないつて云つたね。

妻 ええ。

夫 怖がつちや駄目だよ。水に親しむことが一番大事だ。泳ぐ泳がないは別として、波にからだを浮かす時の気持は、これや、一寸、類がないぜ。強ひて類を求めれば……。さうさな、おれたちがはじめて恋を語つた日の、あの夢心地……。

妻 キザなことは云はないで下さい。

夫 どうしてキザなことだ。お前は、なんでも、それだからいけないんだ。物事を散文的にしか考へない。なるほど、われわれは、平生、無味乾燥な生活をしてゐる。おれは朝から晩まで、紙とインキと算盤の中に頭を突つ込み、お前は、朝から晩まで、綻びと七輪の間を往復してゐるのだ。おれたちの間に、もう、夢といふものはなくなつてゐた。いや、夢どころぢやない。おれたちは、もう、自分自身の姿さへ見失つてゐたのだ。

妻 ……。

夫 たまたま得た僅かの金と、僅かの暇とが、おれたちを、今、あれを見ろ、あの海のやうに、限りなく広い希望の前に立たせてゐるのだ。おい、聴いてるか。

妻 ……。

夫 おれたちは、今まで、これほど太陽に憧れた事があるか、近頃、おれが、これほど物に執着をもつたことがあるか。お前も女だ。おれの心の中に、恐らく永遠に消えようとしてゐた情熱が、今、再び、燃え上りつつあるのを感じないのか。え、感じないのか。

妻 ……。(ちらと夫の方を見る)

夫 どうして、そんなに不思議さうな顔をしておれを見るのだ。おれは、三日この方降り続く雨の為に、気が狂つたのではない。

卓上電話の呼鈴が鳴る。

夫 （平気で）おれは、電話などに用はない。お前の、あの若

々しい……。

呼鈴が、更に、けたたましく鳴り続ける。

夫 ええい、やかましい。（受話機を取り上げ）もし、もし、
なんの用ですか。ええ、さうです。え、東京から……。東京の
誰から……。？ 早くつないでくれ給へ。あ、もし、もし、さう
です。ああ、君か、……。なんだ、どうした。え、うん、なあ

に……そんなでもないさ。

妻　どなた？

夫　小林さ。

妻　小林さん。

夫　いや、いや、そんなこたないがね。馬鹿云ふな。はははは。

うん、なかなかいいとこだ。ああ、海は綺麗だよ。え、ああ、
ゐるよ、ゐるとも……。鼻を連れてちや、だいなしさ。

妻　なんですつて……。

夫　ここにあるよ。こつちを睨んでやがるよ。

妻　なんのお話……。

夫　なんの話だつて聞いてるよ。はははは。東京は暑いかい。

さうか、昨夕からね……。こつちは、もつと涼しいよ。なに、海は平気だがね。ああ、今も出掛けようとしてゐるとこだ。

妻　あたしから奥さんによろしくつて、さう云つて頂戴ね。

夫　へえ、わからないもんだね。そいつあ、大変だらう。今ね、家内から、君の細君によろしくだとさ。うん、適当にやつてるよ。大将は出てるかい。ちえツ、うるせえな。帰る時にや帰るつて、さう云つてくれ。ゐない時だけ追ひ廻すつていふ寸法だね。や、さよなら、え、あ、あ、わかつた。さやうなら……。

妻　なんの御用……。

夫　用事なんかあるもんか。なんだ、雨が止んでるぢやないか。さ、今のうち、早く行かう。（あわてて浴衣を脱ぎすてる。下

にはちやんともう、海水着を着込んである)

妻 (これもいそいそと座を起ち) そんな風をしていらつしやるの。

夫 あたり前さ。海は、お前、すぐそこだよ。庭続きだよ。自動車へ乗つてでも行くつもりか。

妻 ぢや、あたしは……。

夫 お前だつて、それでいいさ。

妻 だつて、あたし、まだ海水着を着てなくつてよ。

夫 ぢや、早く着ちまへよ。

妻 あなた、外へ出てらつしやい。

夫 それより、海岸に着物を着替へる小屋がある筈だ。そのま

ま持つて行けばいい。

妻　人が見てやしない。

夫　愚図愚図してると、また降り出すかも知れない。さ、早く……。

二人はあたふたと外に出る。

それが、やがて、梯子段を降りてしまつたと思はれる頃、また、急に雨が降り出す。

何処かの部屋で蓄音機をかけてゐる。

その曲に足並を合せる如く、悄然として、夫婦が帰つて来る。二人は、黙つて、部屋の中にはひり、思ひ思

ひに自分の座につく。何をするでもなく、ぼんやり、空を眺めてゐる。かすかな溜息。

長い沈黙。

やがて、夫は、鞆から旅行案内を出して、頁を繰りはじめめる。

妻は、枕を持ち出して、昼寝の用意をする。

夫　おい、寝るのはよせ、この上、お前に寝ちまはれちや、おれはどうしていいかわからん。

妻　あなたもおやすみになつたら……。

夫　昨夕七時から、今朝九時まで、十四時間ぶつ通しに寝たものが、また寝ようたつて、それや少し無理ぢやないか。いくら、寝るより外にすることがないと云つたつて、おれたちは、遙々汽車に乗つて、大枚五円の宿料を払つて、名にし負ふ湘南の海水浴場に来てゐるのだ。少しは、氣の晴れることもしてみようぢやないか。

妻　だつて、海水浴が駄目なら、仕方がないぢやないの。

夫　海水浴が駄目なら仕方がないと云つてしまはずに、そこを、なんとか誤魔化せないもんかなあ。

妻　あなたは傘をさして散歩でもしてらつしやい。あたしは、

かうして、横になつてますわ。（寝転がる）

夫 傘をさしてか。傘は持つて来ないぜ。

妻 借りてらつしやいよ。

夫 お前は横になつてるのか。

妻 ええ。

夫 夫は傘を借りて散歩をなし、妻は横になつて退屈を味はふか。洒落にもならないや。

妻 だから、あたしが、こんな処へ来るよりは、着物の一枚もこしらへた方がいいつて、あれほど云つたのに……。

夫 もうわかつた。おれはこれから、旅行して来る。

妻 何処へいらつしやるの。

夫 気の向いた処、日本国中だ。

妻 ……。

夫 一つ、別府あたりへ行つてみるかな。

妻 旅行案内だけでもつてね。

夫 勿論……。これほど金のかからない旅はない。旅行案内といふものは妙なものだね。汽車の時間を順々に見て行くと、知らだも一緒に動いて行くやうな気がする。一種の錯覚かも知れんが、こいつを応用して、何か一つ、どえらい発見でもしやすかな。

妻 ……。

夫 弁当と書いてあると、あの上等弁当の折の香までして来る

から面白いぢやないか。

妻 何が面白いもんですか。

夫 面白くないか。お前にはそれが面白くない。だから、足の裏なんか、蚊に咬まれるんだ。まだ痒いかい。

妻 知りませんよ。

夫 大沼公園といふのは、なかなか景色がよささうだね。北海道へも、一度ぐらゐ行つたつて悪くないな。ええと、時間はどうなつてるかな。

妻 旅行をなさるなら、黙つてなすつて頂戴ね。

夫 黙つて旅行をしろ……？ 所謂、啞の旅行といふ奴だね。

蓄音機の音止む。

夫 いろんなことを云ふやうだが、お前は近頃、何が食ひたい

？

妻 ……。

夫 もう眠つたのか。

妻 ……。

夫 そんな筈はない。たつた今、欠伸を噛み殺してゐたちやな

いか。

妻 ……。

夫 あくまで狸を粧ふつもりか。

妻 ……。

夫 お前がびつくりするやうなことを云つてやるが、それでも
いいか。

妻 ……。

夫 ようし……。云ふぞ。大きな声を出すな。

妻 ……。

夫 おれは、さつき、十年前の恋人に遇つたよ。おれにそんな
恋人のあつたことはお前も知るまい。今までその話はせずにあ
た。お前の心を不必要に乱したくなかつたからだ。しかし、た
うとう、お前にそれを打ち明けなければならぬ日 came。そ
んなに息を殺さなくつてもいい。

妻

……。

夫

向うはまだ独りでゐるらしい。純潔そのもののやうな目をもつた女だ。その目が、昔と少しも變つてゐないやうに、おれに対する気持も、そのまま昔と變りはないといふのだ。おれの方はどうだと云ふから、おれは云つてやつた。なんと云つてやつたか知つてるか。

妻

……。

夫

おい、安心してゐる場合ぢやないぞ。

妻

（脇の下をゴシゴシ搔く）

夫

そんなところを搔いてゐる場合ぢやない。おれはなんと云つたと思ふ。おれはかう云つた。——あなたが、それほどまでに

僕のことを想つてゐて下さるのはありがたいが、僕はもう自由ではありません。すると、そんな事は存じてをりますわ、と云つた。昨日もお二人が睦じさうに、廊下を歩いておいでになるところをお見かけしたんですもの。優しい上に、聡明な方らしいわね、奥さまは……と云ふんだ。おれは返事に困つて、あんな女はざらにありますと云つてやつた。

妻　　（大きな息をする）

夫　　ざらにあると云つただけでは、まだ云ひ足りないと思つたので、あれくらゐ鈍感な女は、一寸類がありませんよと云ひ直した。お前の前だが、それやほんとだからね。

妻　　（枕を直す）

夫　すると、向うはなかなか如才がない。——でも、あなたのやうなお方と一緒にゐるには、その方が結句幸福ですわと云ふぢやないか。なぜですつて白ばくれた聞き方をすると、笑つて返事をしないんだ。

妻　（かすかに躰をかく）

夫　怪しげな躰は手応へのあつた証拠だ。さ、なんとか云へ。

妻　……。

夫　なんにも云ふことはないね。それぢや、先を続ける。——

二人は、それで急に、昔しの親しみを取り返した。その間に、いろいろ細かい話もあつたが、それは略して、兎に角、東京へ歸つたら遊びに来てくれと云ひ出した。寂しく婆やと暮してゐ

るとまで付け足した。そこで、おれは、東京へ帰つたらなんて云はずに、今、これから、あなたの部屋へ行つて、ゆつくりお話をしたいと切り出してみた。どうせなんにもすることはなく、退屈しきつてゐるところだと云つてみた。毎日見あきてゐる女房の側を、さうして一つ時でも離れてゐたいとまで云つてみた。すると、その女の云ふことが振つてゐるぢやないか。——いいえ、それはいけません。あなたの奥さまといふ方を、あんまり近くに感じてゐるところでは、寛ろいだおもてなしもできません。その気持にもなれません。東京の住居は、それや静かな、奥まつたところにありますのよ。知らない人は、尋ねあてるだけに三時間もかかりますわ、といふことで、話は一寸跡切れた。

湯上りの、透き通るやうな手を、縁側の手摺りに置いて、それとなく、何ものかを待つてゐる形だ。結ぶでもなく、開くでもなく、紅^{べに}つ気なしに赤い唇が、心もちふるへてゐたよ。目は無論、渺茫たる水平線の彼方、思ひ出の花咲く国に注がれてゐるのさ。

妻　（寝返りをうつて、夫の方に向き直る。が、これこそ、口は自然に開くに任せ、鼻の孔は、耳鼻咽喉科の診察室に於ける如く、やや、あふ向き加減に奥の方まで見通せる姿勢である）
夫　（これを見て、思はず顔をそむけ）
　　凶々しく寝返りをうつたな。

廊下で、突然「おきんさん」と呼ぶ女中の声。

妻

（はたと目を覚し、或は目が覚めた風を装ひ、むつくり起き上り、寝ぼけ声で、或は何食はぬ顔で）もう、お風呂沸いてるでせうか。

夫

（たじたじとなり、それでも、疑ひ深く）眠つてたのか。

妻

（これには答へず、起ち上つて、手拭、石鹸、化粧道具など取り上げ、ふらふらと出て行く）

夫

（さも気抜けしたやうに、その後を見送る）

二

翌日の夕刻

夫 (ワイシャツ姿で鞆の支度をしてゐる)

妻 (火鉢で手拭をかわかしてゐる)

女中 (勘定書をもつて来る) まだ上りまでは大分時間がござ
いますから、御ゆつくり……。

夫 (勘定書を引き寄せ) また近いうちやつて来るから、よろ
しく……。

女中　どうぞ、是非……。でも、折角明日はお天気らしいご
いますのに、もう一日お延ばしになることはできませんの
か。

夫　ああ、どうも、忙しいもんでね。なに、十分保養にはな
つたよ。東京を離れるといふことが第一の目的なんだから……。

天気の良いのは何処にゐたつて同じだ。ぢや、これで……（勘
定を渡す）

女中　（会釈して去る）

妻　いくらになつてますの。

夫　案外かからなかつたよ。

妻　予定通り……？

夫　まあ、そんなところだ。茶代でも奮発しとかうか。

妻　およしなさいよ、そんな無駄なこと……。それくらゐなら、もう一日ゐた方が気が利いてるわ。

夫　それができれば文句はないさ。あれ見ろ、あの空を……。

　　今まで雨が降つてたなんて嘘みたいだ。

妻　会社の方は、もう一日、どうにかならないかしら……。

夫　さつきの電話さへなければね。——丸で腰に縄をつけられてるやうなもんだ。しかし、今度で、このおれが、如何に会社に取つて、重要な人物であるかといふことがわかつたわけだ。

　　おれは明日の朝、少し遅れて行つてやるよ。さうして、少し不機嫌な顔附をしてゐてやる。係長の奴、きつと、そばへやつて

来て、なんとかお世辞を云ふからね。おれは、無愛想に、鼻で返事をしてやるよ。

妻　あなたはそれでお気が済むでせうけれど、あたしは、帰つて、みんなになんて云ふんですの。どうかしたはずみに、一度も濡らしたことの無い海水着でも見つけられてごらんさい。いい恥さらしよ。

夫　恥さらしなんていふ言葉を使つてくれるなよ。お前がさう思ふなら、その海水着を、一寸鉄瓶の湯で濡らして置けばいいぢやないか。——第一、海にはひつたことが、さう自慢になると思ふかい。

妻　でも、いまましいぢやないの。

夫 同感だ。しかし、物は考へやうでね。折角工面をして海岸へ出掛けたけれど、雨に降られ通しで、たうとう五日間一度も海へはひれなかつたなんていふ話は、人が聞いたつて、そんなに不愉快な話ぢやない。それどころか、聞く人間によつては、涙を流してよろこぶかも知れない。

妻 誰が涙なんか……。

夫 ましてこつちが、少し梢げてでもゐれば、なほさら滑稽でいいぢやないか。

妻 だつて、出掛ける時の景気つたらなかつたんですもの。

夫 いいぢやないか。実際景気のいい話なんだから……。さういふことはよくあるもんだ。予め、かういふことを慮つて、始

めから悄然として家を出てみたところで、誰も感心しやしない。一体、お前に限らないが、お前の家の人達は、お母さんにしろ、姉さんにしろ、お孝ちゃんにしろ、みんな、さういふところがあつていかんよ。

登音がするので話をやめる。

女中 （現はれる。つりをもつて来る） どうもありがたうございます。
います。

夫 （そのうちから、幾らかを取つて） あ、これ、少しだが茶代……。

女中　いいえ、こちらは、お茶代は頂かないことになつてをり
ますから……。

夫　さう。そいつはどうも、なんだな。それぢや、これは、色
々お世話になつたから、君に。

女中　恐れ入ります。

夫　ええと、もう一人の女中さん、ちよいちよい、ここへ来た、
あのひとはなんて云つたつけな、どしどし音を立てて歩くひと
……。

妻　まあ、あんなことを……。

夫　いいぢやないか、ねえ、静かな方ぢやないよ。あのひとを
呼んでくれ給へ。それから風呂番の若い衆もね。唾かい、あれ

や、君……。

女中　いいえ、ああいふ風なんでございますよ。よつぽどのことでもなければ、誰とも口を利かないんでございます。

夫　ああいふ風ぢや、よつぽどのことなんかありつこないや。

女中　では、お荷物がおできになりましたら、どうぞ……。

（出で去る）

妻　女中にいくらおやりになつたの。

夫　一々心配することはない。お前は、東京へ帰るまで、重役の夫人になつたつもりである。

妻　東京へ帰つてからも、そのつもりでゐたいわ。

夫　ゐるがいいさ。お前は、根性まで安月給のお神さんだから

いけない。

妻　だから丁度いいのよ。

夫　丁度いいとは……？　おれを侮辱したつもりかい。そんなことを云ふなら、またお説教を始めるよ。

妻　お説教はもう沢山……。

夫　さうだらう。だが、なんだぜ、この機会に、お前に相談するんだが、もうそろそろおれの気持ちがわかつてくれなくつちや困るよ。お前は、世にも稀なる善良な女だ。どうして口をそんなに曲げるんだ。

妻　……。

夫　お世辞でなく、お前は、おれの為めにこの世に生れて来た

やうな女だ。

妻　　ありがたう。

夫　　だから、さう云つてるぢやないか。その点、おれは果報者だと思つてゐる。

この時、どしどし跫音を立てる女中と、猫背の風呂番とが前後して姿を現はす。

夫　　あ、君たち、いろいろお世話さん……これは、ほんの少しだけれど……。

女中　　どうも……。

風呂番　　（黙つて頭を下げる）

女中　　何か御用はございませんか。

夫　　ありがたう、もう別に……。

女中　　（会釈して去る）

風呂番　　（これも起ちかける）

夫　　あ、君は一寸待つてくれ給へ。君は、この土地の人かい。

風呂番　　（ぼんやり相手の顔を見てゐる）

夫　　この土地で生れたの。

風呂番　　（軽く頭を下げる）

夫　　どうだい、何か変つたことはないかい。

風呂番　　（にやにや笑つてゐる）

夫 君はなかなか評判がいいぜ。

風呂番 （訝しげに相手を見上げる）

夫 おい、なんとか云ひ給へ。

風呂番 ……。

夫 君は、何か、決心をしてゐるんじゃないかい。

風呂番 ……。

妻 あなた、もう時間でせう。

夫 （風呂番の顔を見つめてゐる）

妻 ほんとに、もういいのよ。

風呂番 （会釈して立ち去る）

夫 （いまいましたげに）恐るべき沈黙派だ。

長い間。

妻 あなたは、まあ、なんていふ方でせう。

夫 (突然自嘲的に笑ふ)

妻 (夫の顔を見る)

夫 あれで、あの男、おれをどう思つたらうね。

妻 普通の人だとは思ひませんわ。

夫 なんでもないことが思ふやうにはいかんね。

妻 うつかり人を馬鹿扱ひにすると、あべこべに軽蔑されます

わ。

夫　はじめはそのつもりぢやなかつたんだ。ああいふ風に黙つてゐる男が、何か云ひ出せばきつと素晴らしいことを云ふだらうと、実は楽しみにしてゐたんだ。しかし、あの男は、きつと、素晴らしいことを考へてゐるよ。おれなんか勿論眼中にあるまいが、例へば、おれたち夫婦の生活について、何か、誰にも気のつかないやうな秘密を嗅ぎつけてゐるかも知からない。——おれたち自身にさへ気のつかないやうなね。どうも、そんな気がする。

妻　またそんな勝手な想像をしてらつしやるのね。

夫　さ、ぼつぼつ片づけろよ。忘れものはないね。

この時、番頭が現はれる。

番頭　もうおたちでございますか。生憎どうもお天気都合が……。

夫　いや、立つ時に晴れたから、まあいいさ。

番頭　もう、これで大丈夫だと思ひますが……。

夫　さうありたいもんだ。ぢや、この鞆と、そのバスケット、それから、その細々したものを持つて降りて貰はうか。

番頭　切符は……。

夫　（紙幣を出し）これで買つといってくれ給へ。

番頭　畏まりました。東京駅二等……。

夫 三等だ。

番頭 へえ。（会釈して去る）

妻 帰りはみじめね。

夫 馬鹿云へ、今夜の予定を聞かしたら、そんなことは云へない筈だ。東京には何があると思ふ。オーヴァーランドがあるぜ、千足屋があるぜ、お前の夏のシヨウルがある。

妻 どのシヨウル……？

夫 それから、まだ、いろんなものがある。

妻 いろんなものがあるわ、手の届かないところにね。

夫 また始まった。手が届かなくなつたつていいぢやないか。今度の海水浴だつてさうだ。このあひだまでは所謂手の届かない

計画だつたんだ。それが、かうして実現できたぢやないか。

妻 実現できたと思つていらつしやるの。

夫 雨さへ降らなければね。

妻 それより、もう少し長くゐられればですわ。

夫 さう取るのか。なる程、不平は絶えない筈だ。しかし、お前、かうして、あの海を目の前に眺めてゐれば、海へはひつたのも同じぢやないか。この五日間、毎日、海へはひり通したつたと、思へば思へないこともあるまい。

妻 ……。

夫 海の水は、ただ塩からいだけで、冷たい風呂へはひつたと思へば大した違ひはない。

妻　でも、広さが違ひますわ。

夫　広さは、手足を縮めてゐれば、おんなじだ。目をつぶつて、頭の上に蒼空を頂いてゐるつもりになればいい。

妻　ああして、あとからあとから打ち寄せて来る波の感じがしなければ……。

夫　波の感じは、からだを前後にゆすぶればわけなく出る。兎に角、海へはひるといふことは一つの冒険だからね。毎年、何処の海水浴場でも、二人や三人の溺死者がないことはないぢやないか。それに、川上みたいに、下手なモグリ込みなんかやると、金縁の眼鏡を失くしたりするし、金田の奥さんだらう、真珠の指環を波に浚はれたつて云ふのは……。

妻　安物だつたんですつて……。

夫　何れにしてもさ。それから、貝殻で足の指を切つたり、塩水がはひつて、中耳炎になる奴なんかいくらもある。

妻　さういふことをおつしやるのは、負け惜しみつていふのよ。あんなに海岸行きの効能を並べ立てて置きながら、今更、そんなこと、よく恥かしくなくおつしやれるわね。

夫　お前を慰めようと思つてさ。

妻　そんなら、あべこべに、もつとがつかりしてて頂戴。さういふ見えすいた気休めは、云ふ方でも、云はれる方でも、くすぐつたいばかりよ。残念なことは残念なことにして置かうぢやありませんか。二人だけでね。

夫　　おや、おや、お前がその気ならわけはないさ。それぢや、

今度は、残念なことにして置いて、何時かまた埋合せをしよう。
それでいいだらう。よし、だが、おれは、飽くまでも、今度、
お前と一緒に泳ぎの真似なんかしなくつて仕合せだつたと思つ
てゐる。

妻　　……。

夫　　どうしてつて、お前はそのわけを聞きたがる必要はない。

妻　　わかつてますわ。

夫　　わかつてるなら云つてみる。

妻　　云はなくつても、わかつてますわ。

夫　　お前は勘違ひをしてゐる。それぢや、かういふことがお前

にわかるか。——何時か、そら、隣から蓄音機を預かつたことがあつたらう、旅行中、つかはないと錆びるからつて……。

妻　ええ。

夫　毎晩のやうに、有りつたけのレコードを、よく、飽きずにかけたもんだ。「ヴォルガの船歌」を空で覚えたのもあの頃だ。

妻　それから「スーヴニール」……。

夫　それさ。おれは、かねがね、朝起きがつらいたちだ。

妻　起しやうが悪いつて、毎朝お怒りになつたものですわ。

夫　毎朝、人間が、こんな風にして、折角の夢を破られるなんて殺風景の骨頂だ。せめて、枕もとで、例へば女学生の歌ふやうな歌でもいい、さういふ歌の声で、何時とはなしに、自然に、

目を覚ましてみたら、さぞ幸福だらうと、おれは、かねがね思つてゐた。お前にそれをやれと云つても、どうせ、はいと云つてやる氣遣ひはない。丁度、蓄音機が手許にあるのを幸ひ、一度、その空想を実現させてやらうと思ひ立つた。

妻 さうさう、そんなことがありましたね。

夫 先を云ふな。おれにしまひまで云はせる。それで、ある晩、おれは、お前に頼んで置いた。——あすの朝、おれを起す時に、「もう時間ですよ」なんてガミガミ呶鳴らずに、黙つて、枕もとで蓄音機をかけてくれ。蓄音機で、「スーヴニール」かなんか掛けてくれ。おれは、その一曲が終るか終らないうちに、むつくり起き上つてみせる。さう云つて、おれは、床の中にもぐ

り込んだ。自分で自分の気むづかしい神経を持てあましてゐる矢先だ。何でもいい、早く夜が明けてくれ、空はなるだけ明るく、夢はなるだけ深く、かう心に祈りながら目をつぶつた。一本のビールがやうやく廻りかけてゐた。

妻　翌朝、ちやんと、おつしやる通りにしましたわ。

夫　あの時ばかりは、感心に、おれの云ふことを一度で聞いたね。忘れずに、お前は、おれの枕もとで、「スーヴニール」をかけた。

妻　一度終つたら、もう一度かけろつておつしやいましたわ。

夫　うむ。だが、あれは、もつと寝てゐたい口実でもなんでもない。夢現に聞えて来るあのヴァイオリンのメロデーが、お

れを、果して、幸福の絶頂に押し上げた。と思つたのは瞬間で、だんだん耳がはつきりして来るにつれて、つまり、お前がおれの枕もとで、蓄音機をかけてゐるのだといふことがわかつて来ると、おれの心は、何か、かう、痺れるやうな痛みを感じた、しまつたと思つた。おれは蒲団をかぶつてしまつた。

妻　泣いてらしつたんでせう。

夫　泣いたと思はれてもしかたがない。それほど、おれは、激しいシヨツクを受けた。蓄音機がもう一度「スーヴニール」を繰り返してゐる間、おれは、おれたちの幸福について考へた。おれたちの夢について考へた。おれたちの生活について考へた。

妻　あの日は、ほんとに晴々した顔をして御飯を上りましたわ

ね。

夫 さうか。こんなことなら、毎朝でもかけて上げますつて、

お前も云つたね。おれは、しかし、それを断わつた。

妻 でも、あの明くる朝から、一度呼べばきつとお起きになるやうになりましたわ。尤も、近頃は、また駄目になつたけれど……。

夫 かういふことは、お前に云つてもわかるまいが、おれは蒲団をかぶりながら、つらつら考へた。——こんなことをしてゐては大変だと……。おれは、もう少しで、蓄音機を蹴飛ばし、お前を連れて、何処か人のゐない、山奥かなんかへ隠れてしまはうと思つた。それは、大きな罪を犯した後の、自責にも似た

心の動揺だ。恐ろしい悔恨だ。みじめな自己嫌悪だ。しかし、この気持は、お前に知らせたくなかった。おれはどつと心を鎮めた。

妻　あなたのおつしやることは、本当なのか、常談なのかわからないのね。

夫　おれにもわからない。

長い沈黙。

妻　もうなれつこになつたから、近頃はあんまり気にかけませんけれど、それでも、なんだか頼りないことがありますわ。

夫　　気にかけることはいらんさ。今にわかるよ、おれが何をしようとしてゐるか。おれはただ、お前を幸福にすることしか考へてゐないんだ。

妻　　またそんな……。

夫　　信じないと云ふのか。常談だらう。そんなら、おれの新しい計画を話して聞かさうか。お前は何時か、荻窪へ行つた時に、芝生で囲まれた家を見て、かういふ家に住んでみたいつて云つたことがあつたね。

妻　　どんな家でしたつけね。

夫　　忘れたのか。そら、若い細君が、犬にじやれつかれて困つてゐたぢやないか。この春だよ。

妻 ああ家を捜しに行つた時……。

夫 さうさ。あの家は、たしか四間ぐらゐだつたね。いくらで
建つと思ふ。

妻 ……。

夫 あれで二千円だよ。

この時、最初の女中が現はれる。

女中 あの、もうお時間でございますが……。

夫 あ、さう。（かう云つて、機械的に立ち上る）

妻 （ぼんやり、暮れて行く海の方を見て居る）

—
幕
—

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集3」岩波書店

1990（平成2）年5月8日発行

底本の親本：「落葉日記」第一書房

1928（昭和3）年5月25日発行

初出：「改造 第十卷第一号」

1928（昭和3）年1月1日発行

入力：kompass

校正：門田裕志

2012年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

明日は天気（二場）

岸田國士

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>